

「古典ギリシア語における主観的 語順と客観的語順について」

竹 島 俊 之

トゥーキュディデース『歴史』Ⅰ～Ⅳ巻を資料として用いながら、まず主語の意志を表わす boules-thai と必然・義務を表わす xre という補助動詞を取り上げ、その補文(この場合は不定詞句)との関係を考察し、古典ギリシア語においても補助動詞が補文の前に置かれ、補文においては動詞が最後に置かれる構文が基本的なものとして認められることを実例を挙げて説明した。ところで、この考察を通じて明らかになったことは、トゥーキュディデースの文章では、多くの文脈において、不定詞句の最後に動詞が置かれる傾向があることである。しかしながら、このことを現代ドイツ語のように公式化できないのは、ある文脈では、不定詞句の最初に動詞が置かれる、という事実があるからだと思われる。そこで次にこの文脈条件を記述することを目指して、定動詞の位置についての考察を行い、存在表現、演説の展開部、行為の主体が新しい情報である文(e.g. *erxe de tes stratias Euphamidas* [軍隊を指揮したのはエウプファミダースであった])、あるいは人物の行為、状況が描写されている文においては定動詞が文頭に置かれることを確認した。この語順を主観的語順と名付ける。そして不定詞句がこの文脈中にあるとき、動詞が句頭に置かれている、との説明を行った。一方、定動詞が文末に置かれるのはテーマとレーマで続けられていく演説文、章の内容を総括し、その章を締めくくる文、理由・原因等を表わす従属節などであり、この語順を客観的語順と名付ける。そしてこの主観的語順と客観的語順の区別は話し手の聞き手に対する発話態度を反映しているものであり、その点においてヴァインリヒの言う「語り」/「説明」の発話態度という標識と密接に関係している、との説明を行った。